

「黄鶴楼」

報告：花岡風子

今日は崔顥の「黄鶴楼」という有名な詩でした。黄鶴楼は武漢にある名勝の一つで、長江と漢江という2つの大河が丁字型に交わる、水上交通の要所にあります。今は山の上に聳え立つ巨大な建造物に変わっていますが、この詩が書かれた唐代の昔は長江のほとりに寂しげに立つ二階建て程度の、こじんまりした建物だったようです。

ここでは、古くから人の往来が多く、多くのドラマを生んだ出逢いと別れの場でもありました。黄鶴楼を題材に五百人を超える詩人が七百首もの詩を詠んだ場所でもあるそうです。「黄鶴楼」をキーワードに、『唐詩選』顔負けのアンソロジー¹⁾が出来る程、いわば漢詩のメッカ的な存在です。

「黄鶴楼」と題した詩では、崔顥のこの作品が最も有名だそうです。ところが作者の崔顥は唐代詩人としては、ほとんど知られていない、存在感の薄い詩人です。李白や杜甫と違い、若くして科挙の試験に合格したという類稀なる優秀な素質を持ちながら、飲む、打つ、買うというワル三拍子の性癖の為、出世もままならず、戯れ歌ばかり作り、どちらかというとかバカにされていた詩人だったそうです。しかし、晩年改心したのか、マトモな詩を書き始め、この詩を残しました。この一首だけで、1,300年の歴史に名を残すことになった、言わば植田先生曰く「一発屋詩人」の一人です。

七言律詩の型式にもかかわらず、前半四句は唐代以前の古体詩の様な型破りのスタイルを取り、後半四句は、ビシッと近体詩の型で決めているという面白い特徴を持つ詩です。

七言律詩は二句を一聯として、合計、八句、四聯で成っています。二句一聯毎に場面が変わっていくのですが、最初の場面は、昔の伝説の引用から始まります。

huáng hè lóu
黄鶴楼
作者：崔顥

xī rén yǐ chéng huáng hè qù
昔人已乘黄鶴去
cǐ dì kōng yú huáng hè lóu
此地空余黄鶴楼
huáng hè yī qù bù fù fǎn
黄鶴一去不复返
bái yún qiān zài kōng yōu yōu
白云千载空悠悠
qíng chuān lì lì hàn yáng shù
晴川历历汉阳树
fāng cǎo qī qī yīng wǔ zhōu
芳草萋萋鹦鹉洲
rì mù xiāng guān hé chù shì
日暮乡关何处是
yān bō jiāng shàng shǐ rén chóu
烟波江上使人愁

その昔、仙人が壁に黄色い鶴の絵を描くと、それが本物の鶴になり、やがて仙人はその鶴に乗って天に昇ったという有名な話もありますが、そのほかにも多くの謂れを持つ黄鶴楼から、ボンヤリと辺りを眺める詩人の連想は、過去の伝説の世界へと飛んでいきます。

第二場面では、黄鶴が飛び立った空を見上げると青い空に白い雲が広がり、黄鶴の姿はすでに無い。ここで悠久の歴史と広大な空という時間と空間が一気に交錯します。

第三場面、晴れた空から視線を下ろすと、眼前に対岸の町漢陽の樹々の緑が広がり、更に視線を下ろすと、眼下を流れる長江の中洲に春草が青々と茂っているという情景と共に、詩人の思考は今現在へと向かいます。鬱蒼と茂る春草から、屈原を偲んだ『楚辞』の一句が念頭をかすめ、詩人の胸には旅に出たきり、帰ってこない人を連想。思えば、まるで浮き草のようだった自分の半生がそれ

に重なる…。

第四場面、次第に日も暮れてゆき、「ああ、自分は帰るべき故郷の方角すら分からない」という虚しさが広がり、更に川面に夕靄が立ち込めていく中で、詩人の心に寂寥と望郷の念が迫る…という内容です。

「川べりにたって夕暮れの景色を眺めながら、オレの人生いったい何だったんだ？なんて、コレはもう演歌の世界ですねえ。古賀政男が作曲したらどんな歌になるんでしょうね。昭和歌謡の世界に浸る感じですかね」

と、植田先生のコメントに一堂どっと笑いの渦。このような植田先生にしか語れない面白いコメントがこの漢詩の会の最大の魅力です。

さらに今回、植田先生はこの詩に特別な思い入れがあるというご自身のエピソードもお話し下さいました。それは若かりし頃の植田先生がまだ定職がなく、ある女子高の国語の臨時講師として教壇に立たれていた当時、教科書に太宰治の短編小説「竹青²⁾」が載っていたそうです。この小説は中国の怪異小説集『聊齋志異』の中の同名の一話を翻案した作品ですが、その小説の中で、この「黄鶴楼」の第3聯と第4聯が引用されているのが、妙に印象に残ったそうです。

太宰治はこの作品に非常に自信があったようで、中国人に訳してくれと見せたところ、この作品は日本で発表されるよりも前に中国で雑誌に載ったという逸話もあるそうです。

太宰治と中国古典という、また面白いテーマが浮上りました。それにしても、過去の日本の教養人がごく当たり前に親しんできた中国古典の世界が、今現在、どんどん日本語の中から忘れられ、消え去ろうとしていることを残念に思います。

中国の古典に親しむことは、日本語をより豊かに格調高くする為にも必要不可欠だと、私個人としては思うのですが……。そして、詩人一人一人の個性と歴史性に満ちたドラマがふんだんに盛り

込まれた豊かな漢詩の世界も、日本人の心を豊かにしてくれる教養の一つとして大事にしてほしいと思います。

ということで今回は「ちょいワルオヤジ、会心の作」的な作品でしたが、人生、散り際に至ってもまだまだ輝ける希望はある、この崔顥、ある意味、中高年にとっては希望の星かもしれません。

■注

1) アンソロジー：多くの場合、主題や時代など特定の基準に沿ったものが複数の作家の作品から集められたもの。(万葉集、古今和歌集、唐詩選など)

(Wikipediaより)

2) 竹青：本作品の末尾に「自註。これは、創作である。支那のひとたちに読んでもらひたくて書いた。漢訳せられる筈である」とある。太宰自身が書き記していた「創作年表」の「昭和二十年」「正月号」の項に、「小説(漢文/竹青)大東亜文学30」とあるため、1945年1月、中国語訳版「竹青」が『大東亜文学』(電報通信社)に発表されたと考えられていた。掲載誌が発見されてないため、翻訳はされなかったのではないかという説も強い。

太宰が本作品を書くときに拠った本は、『聊齋志異』(北隆堂書店、1929年、田中貢太郎訳・公田連太郎註)である。

(Wikipediaより)

※編集部注：キーワードを [太宰治 竹青] でネット検索すると、青空文庫(インターネット上の無料電子図書館)で「竹青」の全文が読める。

http://www.aozora.gr.jp/cards/000035/files/1047_20130.html

